



Title	〈翻訳〉 ヘアマン・バング『ティーネ』序文試訳
Author(s)	萬屋, 健司; バング, ヘアマン
Citation	IDUN –北欧研究–. 2025, 25, p. 207-216
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100762
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[研究ノート]

ヘアマン・バング『ティーネ』序文試訳

萬屋 健司

本稿は、デンマーク人著作家、ジャーナリストのヘアマン・バング (Herman Bang, 1857-1912) が 1889 年に発表した小説『ティーネ』(Tine) 序文¹の全訳である。訳出にあたっては、Bang, Herman. 1889. *Tine*. Kjøbenhavn: Forlaget af I. H. Schubothes Boghandel. を底本とし、適宜 2012 年の復刊版 (Buk-Swienty, Tom (forord). 2012. Herman Bang. *Tine*. København: Gyldendal.) および英訳版 (Christophersen, Paul (trans.). 1984. Herman Bang. *Tina*. London and Dover N. H.: The Athlone Press.) を参照した。

* * * * *

母²の思い出に捧ぐ

この本はあなたのものです。

あなたがまだ生気に満ち溢れて幸福だった頃、幼いわたしといつもしていたように、ある日ふたりで黄昏時の町の通りを歩いて「宝探し」をしましたね。店のショーウィンドウに欲しいものを見つけては片っ端から指差して、わたしたちのものではないそれらの素晴らしさについて、同意したり反論しあったりしました。わたしたちは本屋の窓の前にも立ち止まって、あなたはすべての本の題名を読みあげて、こう言いました。「いつかあなたが本を書くときは、その一ページにわたしの名前を記してね」

その後、あなたが健康を害してからは、9 月の遅い午後の日差しを求めて、しばしば「小さな森」の細い並木道を散歩しました。ある日、わたしの手をとって、不安と優しく愛撫するような慈しみに満ちたその声であなたは言いました。「わ

¹ Bang, Herman. 1889. *Tine*. Kjøbenhavn: Forlaget af I. H. Schubothes Boghandel, V, VII-XIX.² Thora Elisabeth Salomine Blach (1829-71).

たしの坊や、わたしが死んでしまったら、そしてあなたがいつか芸術家になったら、みながわたしのことすっかり忘れてしまわないように、そうならないようになると約束してくれる？」

そしてあなたは泣きました、お母さん。死ぬ運命にあることを、あなたは知っていたからです。

わたしはあなたの願いを忘れたことはありません。

この本に、あなたの名前を記します。この本があなたの愛情や真心、その魂に相応しいものでないことは承知しています。しかし、この物語はわたしの心の中であなたと、あなたがわたしを生んだ場所の記憶から生まれ、育っていきました。あなたは死の床に就くまで、そこを“わたしの家”と呼んでいましたね。

やがて戦争と異国の軍隊が、喜びと陽光の中であなたが暮らしていた穏やかで居心地の良い、明るい場所をすっかり荒らしてしまいました。そしてわたしたちの古い家に敵の兵隊たちがやって来たように、時をおかずしてわたしたちにも不幸な出来ごとが起こりました。

あなたがこの世を去ってから長い年月が経った今、わたしは悲惨な敗北と失われたわたしたちの家について語ったこの本に、あなたの名前を記します。

* * *

この物語は、わたしが最初に暮らした家の記憶から生まれた。

数年前まで、わたしは幼い頃の鮮明な、色褪せない思い出を三つしか持ち合っていないと思っていた。それは三つのイメージで、そのすべての中心に母がいた。

わたしはアサバレ³の家の大きな居間の窓辺に座っている黒衣の母を見ている。白い手を膝に載せ、押し黙って身動きせず、顔色はひどく青ざめている。彼女は何も言わず、泣いてはいなかった。しかし子供だったわたしたちは、この尋常ならざる悲しみに怯え、彼女を揺すってそのわけを訊いた。しかし彼女はわたしたちの手を払い退けた。まるで小さな手が、ただドレスに触れるだけで彼女に痛みを与えるかのように。

³ Asserballe (原文の綴りは「Adserballig」)。ユラン半島南東部に近接するアルス島 (Als) の町。1864 年の第二次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争でプロイセンに占領された。バングは父親が牧師だったため、アサバレの牧師館で生まれ育った。

この情景が、わたしの幼少期の最初の記憶である。二つ目は、その1年ほど後の出来ごとだったよう思う。母と一緒にわたしたち——姉とわたし——は大急ぎで歩いていた。何かに急き立てられるかのように、道づたいに進み、原っぱを越え、幼いわたしはかろうじて付いて行くことができた。青々とした丘の麓まで来ると、わたしたちはその上に登った。そこからは、今もなお緑の中に建っているわたしたちの教区教会や他の教会、そして多くの家々が見えた。母はわたしを抱き上げ、眼下に広がる土地や建物を一つずつ指し示しながら、再び口をつぐんで激しく泣いた。それからわたしを草の上に座らせて、緑豊かな大地をじっと見つめていた——後になってから、幼心にわたしはあの日、島のすべてを見渡すことができたのだと思っていた。「お母さん、お母さん」わたしは問いつづけた。「どうして泣いているの？」

「ここを離れなければならないからよ」そう彼女は答えた。

次の日、わたしたちはそれまで暮らした家を後にした。

最後の記憶は、この出来ごとと密接に結びついている。わたしたちはホーセンス⁴にいて、少年だったわたしには、自分たちが貧しい哀れな一家に落ぶれたように思えた。街中の住まいはひどく狭苦しく感じられ、訪ねてくる者は誰もいなかつた。

それは夕方、あるいは夜のことで、外は嵐が吹き荒れていた。母は震えながら——寝間着姿で髪を下ろしたままの彼女は、ベッドから急いで飛び起きたのだろう——弟のオーウの揺り籠の上に身を屈めていた。その周りを小間使いのアルス島の少女たちと、泣き喚くわたしたちが囲んでいた。

少女たちは震えながら、かろうじてわたしたちを腕に抱いていた。そしてすべての扉が開け放されたままバタンバタンと音をたて、窓はガタガタ鳴っていた——わたしたちはほとんど何も身に着けていなかった。

通りには地面を踏み鳴らす慌ただしい多くの足音と、不安に満ちた警笛が響いていた。

「あれは何？お母さん、いったい何が起こっているの？」とわたしたちは泣き叫んだ。

「デンマーク人が逃げているのよ」恐怖に震える声で彼女は言った。

わたしたちは大声で泣き、アルス島の少女たちは二匹の犬のように呻き声をあげた。そしてわたしたちは、絶え間なく通りを駆け抜けていく人々と先を争う兵隊たち、そして嵐の中を近づいたり遠のいたりする笛の音を聞いていた。

⁴ Horsens. ユラン半島東部の町。1863年にバング一家はアサバレからホーセンスに移り住んだ。1864年、第二次シェレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争でホーセンスがプロイセン軍に占領された時、バングは家族とともにこの町にいた。

・・・この敗走と混乱、恥辱が綿い交ぜになった一つのイメージは、わたしという存在の隅々にまで浸透している。今もなお、破滅や破壊、死、荒廃を描写するペンの先に、わたしはこの時の不安と恐怖を感じる。それはとても強烈なものだったので、すでにわたしの最初の作品に、その印象に基づく描写が顔を出している。以来、この同じ印象は繰り返し何度も荒廃のイメージの中に姿を変えて現れ — やがて大きくなうねりとなつて、この本の中で余す所なく具現化したのだ。

わたしの脳裏に強く焼きついているこれら三つの思い出は、結局のところ何を意味しているのだろうか？それらは単に、わたしの気質の深いところにある三つの心理の核心を突いているに過ぎないのか。あるいは、それらは — ありそうもない事だが — 独断的に自己を形成し、初期の創作活動のうちに解けない結び目を作ってしまったのだろうか。

確かなのは、それらがこの本までのわたしの著作に、一種のライトモティーフとして繰り返し現れるという事である。わたしはアサバレの家の居間で悲しみに暮れる黒衣の女性 — 以来、わたしは彼女を雪花石膏で出来た黒衣の彫像として見ていた — が、ニナ・フーイ⁵やカティンガ・バイ⁶の原像であると確信している。その印象が、彼女たちの無言の悲しみや諦めを産み出したのだ。

そしてアルス島との最初の別離も、同じように深い痕跡を留めている。旅立ち、家庭の崩壊、放浪、別れの挨拶が、痛みを伴ってあらゆる情景描写に現れる — この本において、離別の悲しみは序章に過ぎない。

しかしそれら以上に、わたしがどこについて何を書こうと常に — 主題、描写、文体において — ホーセンスからの撤退を兵隊たちに呼びかける警笛の響きと混乱、そして恐怖が繰り返し現れるのだ。

*

前述のように、数年前までわたしはこれら三つの思い出が、私の脳裏に焼きついた子供時代のもっとも古い記憶だと思っていた。

しかし外国で暮らしている間にもっと多くの思い出が蘇ってきた。それはわたしが『化粧漆喰』⁷ の筋立てを模索していた時のことだった。

芸術家なら誰しも、一つの作品の構想を練ったり、あるいはその制作に取り掛かろうとする時、自分の脳という神経がどれだけ多くの詭計を巡らせて、計画の実現を遠ざけようとするかご存知だろう。芸術家と彼の偽善的な神経の間には、

⁵ Nina Høeg. バングのデビュー作 *Haabløse Slægter* (1880) の登場人物。

⁶ Katinka Bai. *Stille Eksistenser* (1886) 所収の短編 *Ved Vejen* の主人公。

⁷ Stuk (1887). *Ved Vejen, Tine*とともにバングの代表作の一つ。

この世でもっとも奇妙な不和がある。つまりその神経は、待ち受けるあらゆる苦労を恐れて、無数の術策を駆使しながら芸術家の計画を妨害するのだ。それは互いに相手が欺いていることを知っている抜け目のない二人の賭博師のように、永遠に終わらない騙し合いである。

絵筆や彫塑べら、あるいはインクを一瞥しただけで、脳は何週間にもわたって芸術家に抑えがたい不安を抱かせるだけではない。

それは更に、馴染みのない記憶や作品の構想とは無関係な思い出を、援軍のように雨あられと呼び集めて彼を混乱させる。押し寄せる別のアイデアや思いがけない構想の幻影は、彼方にある完成像の確かな岸辺のように思われるものだ。

創作者の意思とその芸術的な構想、そしてそれに服従することを拒む彼の脳。アルス島の家にまつわるすべての思い出が大挙して蘇ったのは、まさにこの対決の最中のことだった。

突然あの場所が、人々の顔や身振り、納屋が目に浮かび、音や独特のアクセントが聞こえ、その空気さえも感じた。自らの意思に反して——というのも、わたしはそことは別の場所、異なる環境、次元の違う世界に属すことを心から望んでいたからだ——暗闇がゆっくりと和らぎ、薄らいでいくように、最初に暮らした家のすべてが蘇った。

わたしが戦争⁸の前に離れ、以来25年間目にしなかったその場所が、小道の一筋一筋、庭の灌木の一本一本、あの家のすべての部屋や壁紙とともに目の前に広がっていた。村には大きな農場がいくつかあったこと、そして生垣のある通りや小さな池の傍の鍛冶場と教会の広場、学校を思い出し、その住人たちを再び見た。

以来、これらの思い出はわたしの元を去ろうとせず、さらに多くの記憶を呼び覚ました。それらは生そのものの明快さと力強さを伴っていた。そして最初に、意識の及ばない記憶の彼方から何の前触れもなく現れ出たように、それらはその本質が不確かなるわたしの精神の中でゆっくりと、しかし抗い難くより堅固に凝縮し、やがて失われ、荒れ果てた家のイメージを紡ぎ出したのだ。この本の旋律は、またもや警笛と敗走の足音となった。

*

ここで一言断っておきたい。

一冊の本が生まれた背景は、多くの人々にとって特段興味を引くものではないだろう。そしてわたしがそれについて語り、自己満足の極みに戯言を並べ立てるることは、またしても栄誉ある一般読者をわたしの並外れた自意識でうんざりさせ

⁸ 1864年の第二次シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争。

るだけだという人々にも事欠かないだろう。あるいは、わたしが記憶の明瞭さと見せかけの鮮明さを装って、これらの思い出から紡がれた物語にくっきりとした輪郭を与えようとしている、という人もいるかも知れない。

しかし、決してそうではない。

これらの記憶がわたしにとってどれほど鮮明なものであったか、それが読者には何の関係もないことは十分承知している。読者は、この同じ記憶が物語を通じて説得力をもち、そして自分たちの心が動かされることによってのみ作品を評価する。

むしろ一冊の本を解きほぐし、その中に、そしてその背後にあるものを示すのは、極めて思慮に欠ける手法かもしれない。すべての芸術作品は能う限り自律し、それ自体が語るべきなのだから。

しかし実際のところ、こうしたわたしの手法は心理学者にとっては興味深いものだろうし、昨今またもや復活したある種の美学的論議 — 作家たちは彼らの作品の起源と手法について明らかにしたことがあったか、彼らは創作活動に伴う脳の働きを制御しようと努めたか云々 — よりも芸術の本質についての有益な知識を提供するだろう。

それゆえ、精神世界の薄闇に束の間の朧げな光を灯す示唆より以上のものが得られるかもしれない。

*

批評家と一般読者は、『化粧漆喰』の叙述における耐えがたい混乱と、雑踏のような登場人物たちの群れに苦言を呈した。ゆえにこの物語では、混乱の度合いを小さくしようと試み、登場人物の数も減らした。

しかしそれがどれほど上手くいっているかはよくわからない。この混乱と多様性は、何人も干渉できないわたしの心象から生じるものようだ。少なくとも、わたしはそう理解している。心に浮かぶ一つ一つのイメージの中にのみ、わたしは登場人物たちの姿を認め、そしてさまざまに変化する状況の中でのみ、彼らが話す声を聞く。わたしはしばしば視線や身振り、一つの言葉を通じて彼らの心の内が明かされるまで、何時間もじっと待たねばならないし、それらは現実に生きている人々 — 実際に付き合いのある知人 — の胸中を推し量るように、ただ推測し得るものに過ぎない。

従ってもしもわたしが一つの短い場面を動きと口調 — 登場人物の本性を示す小さな身振りと、その内面をさらけ出す言葉の調子 — によって表現しなかったとしたら — 場面全体を生き生きとした、現実の生そのもののように、鮮やか

なものになるよう努めなかつたとしたら、読者を納得させることなど如何にして望み得るだろうか？

事物を「生き生きと」叙述するのは骨の折れる — そしておそらく多くの場合、成功しているとは言い難い — 試みである。

しかし、生とは動きと多様性なのだ。

そこには種々雑多なものが存在していなければならない。ティーネが暮らす学校を、その周りを取り巻く環境から引き離して叙述するのは不可能であることを忘れないでほしい。隣人の声は、窓や扉を抜けて聞こえてくる。彼らの暮らしは、学校の生活と混ざり合っているのだ。

水面に投じられた石のように、学校の運命が起こす波は広場を越えて宿屋と鍛冶場の両方に押し寄せ、そこで起きた出来事がまた新たなるねりとなって返す。それゆえ、学校での暮らしを理解するには、宿屋と鍛冶場の生活についてもよく知らねばならない。

地平線の彼方の牧草地でも、そこにおいてさえ、生の営みは連綿と続き、人々の生活があることを知る必要がある。ガタゴト音を立てて進む荷車や吠える犬、遠くに聞こえる歌は、そこでの暮らしについて語り、我々にその場所を思い起こさせるに違いない。

この学校を現実のように生き生きとしたものとするためには、その周りを思い描かねばならないし、アルス島の人々をそこに住まわせなければならない。学校の前の十字路に旅人はいないだろうか — 何百台もの荷車が、何百もの家々、何百もの人々の人生に向けてそこを通り過ぎていくのではないだろうか？

そのとおり — ならば通りを行き交う人々の心を感じなければならぬ。彼らの来訪、旅立ち、問い合わせ、挨拶、返答 — それらは学校という存在の一部であり、そして物語に描かれなければならないのだ。

これらすべての動きの中で生じる混乱を、いったいどうやって避けることができるだろう？反対に、まさにこの混乱こそが、絶え間ない動きを描き出しているのではないだろうか？読者は「次から次に覚えられない」と言う。ならば、物語の全体像が、この混乱から形作られた大まかな輪郭とともにのみ立ち現れる場合はどうすれば良いのだろうか。

多様性と動きのみが、わたしに生のイメージを与えてくれる。それらはわたしの文学的手法であり、手放す事はできない。願わくは、その手腕により一層の向上が見られんことを。しかし、生を硬直したものと見る芸術 — その大きな、究極の野望は、この不可解で不可知な、絶え間なく変容し続ける生の営みを留めることにある — には、その数千倍の困難が付き纏うだろう。

お母さん、あなたはわたしに、みながあなたのことをすっかり忘れてしまわないようにしてほしいと頼みました。

青年期を過ぎた今、この10年の間にわたしが書いたもの、生きるために書き、書くために書いたもののすべては、しばしば、遙か彼方にあって、なお極めて明瞭なものに思えます。

書かれた言葉のすべてにおいて、二つの要素が対立していました。わたしの古い家系とそこに新しく加わった異質なあなた。それらが相入れることは決してないでしょう。あなたは熱狂的な愛着をもってその名を称しました。あなたはそれを、わたしと同じように愛しましたね。一世紀に亘ってその一族は、この国の歴史に名を残す立派な指導者や、北欧のもっとも偉大で国民に愛された著名な医者を代々輩出してきました⁹。

しかし後にその子孫は牧師¹⁰になり — なぜなら彼らは血を見ると卒倒してしまったからです — あるいはその空っぽの頭を人為的に目覚めさせなければならぬ、のらくらした怠け者になりました。

あなたはしばしば、私たちの家系の栄誉について語ってくれました¹¹。同じ血を引く偉大な医者の一人¹²は、その思い違いや血脉の病気にまつわるあらゆる話を私に遺していきました。彼は一族の歴史の糸を — そこからわたしが何かを学べるように — 紡ぎたかったのでしょう。

わたしの青年時代の著作に、その極めて多くにわたしの一族が描かれています。そして、お母さん、そこにはあなたもいるのです。

ステラ・フーイ¹³やニナ・フーイ、アウネス嬢¹⁴、カティンガ・バイ — 彼女たちはあなたの血を引いています。彼女たちの姿が描き出すのはあなた、あなただけ

⁹ バングの家系は18世紀から医学の分野で著名な人物を輩出してきた。曾祖父のFrederik Ludvig Bang(1747-1820)は王立病院(Det Kongelige Frederiks Hospital)の医長を務め、その息子のOluf Lundt Bang(1788-1877)は王室の侍医となるなど、19世紀前半のデンマーク医学会における中心人物であった。また、1834年にシェラン教区の主教となったJacob Peter Mynster(1775-1854)はOluf Lundtの異母兄弟、自然科学者で哲学者、詩人のHenrik Steffens(1773-1845)、牧師、詩人、教育者でフォルケホイスコーレの創始者であるN.F.S.Grundtvig(1783-1872)はその従兄弟にあたる。

¹⁰ バングの父Frederik Ludvig Bang(1816-75)は牧師だった。

¹¹ バングの母親はChristian Winther(1796-1876)の詩やÖhlenschläger(1779-1850)の戯曲などのデンマーク・ロマン主義文学と合わせて、一族の栄誉にまつわる物語を7人の子供たちに語って聞かせた。バングはいつしか、確証はないながらも、その家系がバイキング時代に遡る古い名家であると信じるようになった。(Mortensen, Klaus P & Schack May, red.. 2009. *Dansk litteraturs historie. Bind 3: 1870-1920.* København: Gyldendalske Boghandel, 210.)

¹² 祖父のOluf Lundt Bang(註9参照)。1875年に父親が死去した後、バングはコペンハーゲンの祖父のもとに身を寄せた。

¹³ Stella Høeg. *Haablose Slægter*(1880)の登場人物。

¹⁴ Agnes Linde. *Ved Vejen*(1886)の登場人物。

なのです。あなたの喜びと悲しみから生まれた子供たち。あなたの顔とあなたの声をもち、あなたの心で愛し、苦悩する。そして彼女たちはあなたのように若くして、深い悲しみのうちに死んだのです。

もしも彼女たちの物語が語り継がれるならば — それがたとえ短い歳月であつたとしても — あなたが忘れられることはないでしょう。

瞬く間に閉ざされる扉の奥にちらりと見える、明るい時代とあの家の思い出に、あなたの名前を記します。戦争がわたしたちの古い家を襲ったように、程なく不幸な出来ごとと死がわたしたちのもとへやって来ました¹⁵。

ヘアマン・バング

* * * *

訳者の力不足と紙数の都合から、本編の翻訳を提示することは叶わなかったが、序文に凝縮されているこの物語の、あるいはバングの創作活動に通底する空気感は隠げながら感じていただけるのではないかと思う。願わくは、未来のデンマーク文學者が本稿の誤訳を正し、稚拙な表現を洗練させて、喪失の悲しみに閉ざされた、しかしヴィルヘルム・ハマスホイの絵のように美しい、この灰色の物語の魅力を十全に伝える日本語訳を完成されんことを。

¹⁵ バングの父は躁鬱病を病み、1860 年代末から入退院を繰り返した末、1875 年に死去した。母は 1871 年に結核で、後には兄がチフスで他界した。バングにとって、家族の相次ぐ病気と死は、祖父以前の祖先の輝かしい栄光と対照的なものであり、また自身が同性愛者であったこととも相まって、一族の生物学的な退行の徵候として受け止められた。

Forord til *Tine* (1889) af Herman Bang (oversættelse)

Artiklen er en oversættelse af forordet til *Tine* (1889) af Herman Bang. Kildematerialet var: Bang, Herman. 1889. *Tine*. Kjøbenhavn: Forlaget af I. H. Schubothes Boghandel., samt en nyere udgave (Buk-Swienty, Tom (forord). 2012. Herman Bang. *Tine*. København: Gyldendal.) og en engelsk version (Christophersen, Paul (trans.). 1984. Herman Bang. *Tina*. London and Dover N. H.: The Athlone Press.). Disse henvises der til efter behov.

Kenji Yorozuya

Kildematerialets sider V og VII til XIX er oversat her. Hovedsagelig på grund af min mangel på færdigheder i dansk sprog, og også begrænsningen af antal sider tildelt hver bidragyder, kunne jeg ikke selv oversætte hele romanen. Jeg bliver dog glad, hvis man kan mærke atmosfæren en lille smule, som fortællingen bærer, og er koncentreret i forordet. Atmosfæren er også konsekvent i alle Bangs romaner og noveller. Jeg håber desuden, at en litterat i fremtiden vil rette denne artikels fejl, og gøre de klodsede udtryk mere raffinerede, og fuldstændiggøre oversættelsen af den sorgelige, men smukke og grå fortælling, der ligner et maleri af Vilhelm Hammershøi.